

正史を訪れる

十二章 新羅の王統

森隆一



仏国寺双塔（Wikipedia「仏国寺」より）

はじめに

ここでは新羅の王統を主に考察し、併せてそれら各王家の出自も考えていく。方法としては、まず正史を眺め、王統を調べる。続いて、三国史記の王統と比較検討を行う。これは、副次的に三国史記の信頼性の検討の第一歩になると考える。

新羅のイメージについて、一般的には「朝鮮三国の1つであり、唐の高句麗と百済の平定のもとに朝鮮を統一し、慶州を都としていた」というものであろう。統一新羅の時代にも、安東都護府が668年から756年まであったということは知られていない。これは、形式的なものかもしれないが、唐による朝鮮の二重統治といえる。

武烈王と文武王により統一新羅は形成された。このとき、よく知られている白村江の戦いで日本（倭）・百済連合軍が唐・新羅連合軍に破れ、この後百済は滅び、日本(倭)は朝鮮から撤退した。

新羅の建国も、百済と同様に、はっきりしない。正史に登場するのは、百済よりさらに遅く、梁書の521年である。

12.1. 正史の記事（新羅の出自を主に）

新羅が正史に現れるのは、梁書・隋書・（新、旧）唐書と南史・北史である。梁は502年から557まで続いた南朝の王朝で、楽浪郡と帶方郡が滅びた313年からは200年程後の王朝である。したがって、朝貢は各国が直接都へ派遣したことになり、正史の記事は使者への質問が基礎になっていたと考える。したがって、それなりに根拠のある話とみなせるのではないか。地勢は各王朝が存在していた時のものとする。出自に現れる地名は、前百済・前新羅のもの可能性が高いと考える。ここでは原則として、唐書は検討の対象から外すことにする。

まずは、梁書の記事を見ていこう。

“普通二年 521 募王名が秦が百済に帯同して奉獻してきた。”

王募名秦 始使使隨百済奉獻方物

が正史における新羅の記年記事の初出である。この記事の前に次が書かれている。

“新羅の祖先は本の辰韓の一つである。辰韓は秦韓ともいう。都より1万里の所にある。言い伝えでは、秦の時代に難民が役を避けて馬韓に来た。馬韓はその東の界に住まわせた。秦の人であることにより秦韓と呼んだ。その言葉や物の名で中国に似たものがある。”

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有似中國

“辰韓は初め 6 国であったが 12 国になった。新羅はその 1 つであり、百済の東南 5000 里余りの所にあった。東は大海に臨み、南北は句驪と百済に接している。魏の時は新盧といい、宋の時は新羅または斯羅といった。国は小さく、自ら使いを送ることはできない。”

辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里 其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通使聘

梁の都は建康(建業、南京)である。

秦の時代の難民はともかく、徐福のような人が他にもいたということを見た記憶がある。これが正しいければ、そのような人が辰韓(の国)を造ったのかもしれない。

新羅を辰韓の後裔としている。始有六國 稍分爲十二國 は三国志にも書かれている。新羅則其一也 と 新羅者 其先本辰韓種也 は同じことを言っていると思われる。其一 は 六國 の一なのか 十二 の一なのか。その他の記事は三国志と晋書の内容に含まれる。

位置に関しては、初めは馬韓の東界に居住したとある。引用の後半では百済の東南、あるいは、南となっている。12 国になったのが、新たに 6 国

が加わり、幾つかは北の方、幾つかは南にあったとすれば、説明がつく。
新盧・新羅・斯羅はそれらの国の一つ可能性があるのか。ただし、辰韓の南は弁韓(弁辰)があったので、辰韓がこの地を侵略したことになる。

其國小 不能自通使聘 から、単独では朝貢できなかったため、他国に帯同したということになる。普通二年 521 の記事では百済に付随したと書かれている。

隋書の記事を見ていく。

“新羅は高麗の東南で韓の時は樂浪郡に属する地であり、斯羅とも称した。魏の將軍母丘儉 -255 が高麗を打ち破った時、(高句麗は)沃沮に逃げ、その後故国に帰った。留まったものが、新羅を造った。故にその人々は、中国・高麗・百済の人も混じっている。さらに沃沮 不耐 韓濊訳の人もいる。その王は本は百済の人であった。海に逃げ新羅に来て、その王となった。”

新羅國 在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將母丘儉討高麗 破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗 百濟之屬 兼有沃沮 不耐 韓濊之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國

“金真平の代になって、開皇十四年 594 使いを派遣した。”

傳祚至金真平 開皇十四年 594 遣使貢方物

この隋書の記事は興味深いことが書かれているが後で考察する。

南史では、梁書とほぼ同じことが書かれている。出自の詳しくは北史を見よと書かれている。

北史では殆どが隋書と同じ記事であるが、次の記事は隋書にない。

“初めは百済に附庸した。百済が高麗を攻めたとき従わず兵を帰した。後に強勢となって百済を襲い、迦羅國を附庸した。” 初附庸於百濟

百濟征高麗 不堪戎役 後相率歸之 遂致 強盛 因襲百濟 附庸于迦羅國焉

位置と由来は殆どが梁書と同じであるが、次の記事は上記隋書の記事と同じようだが、其先 と 初 は若干ニュアンスが異なる。初 は新羅の初めであるが、其先 は新羅になる前のことと理解する。

goo 国語辞書「ふ-よう【付庸／附庸】の意味」では「宗主国に従属してその保護と支配を受けている国。従属国」とある。

旧唐書では

“新羅は弁韓の末裔である。その国は漢の時の樂浪郡の地にある。東と南は大海があり、西は百済と接し、北隣は高麗である。” 新羅國

本弁韓之苗裔也 其國在漢時樂浪之地 東及南方俱限大海 西接百濟 北鄰高麗

と書かれている。新唐書は大筋は旧唐書と同じである。

武徳四年 621 王真平が使いを派遣し朝貢した。 王真平遣使者入朝

隋書の 毋丘儉討高麗 についてみる。三国志魏書三少帝紀には

“正始七年 246 二月 幽州の刺史毌丘儉が高句麗を討った。五月、濊貊を討ち、これらを皆破った。韓の数 10 国が投降した。”

幽州刺史毌丘儉討高句麗 夏五月 討濊貊 皆破之 韓那奚等數十國各率種落降と書かれている。なお正始四年には 十二月 倭國女王卑彌呼遣使奉獻 の記事がある。

烏丸鮮卑東夷傳では、高句麗条にはなく東沃沮条に書かれている。

“毌丘儉が句麗を討った。句麗王宮は沃沮に奔走したが、軍を進めこれを撃った。沃沮の村落は皆これを破り、3000 人の首を斬った。宮は北沃祖に奔走した。・・・王頎は別軍を派遣し、宮を追討した。” 丘儉討句麗

句麗王宮奔沃沮 遂進師撃之 沃沮邑落皆破之 斬獲首虜三千餘級 宮奔北沃沮 北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗南北皆同 與挹婁接 挹婁喜乘船寇鈔 北沃沮畏之 夏月恆在山岩深穴中爲守備 冬月冰凍 船道不通 乃下居村落 王頎別遣追討宮

Wikipedia「カン丘儉」では

母丘儉?-255 は、中国三国時代の魏の武将。字は仲恭。司隸河東郡聞喜県の人。父は母丘興。妻は荀氏。弟は母丘秀。子は母丘甸・母丘宗ら。娘は母丘芝。孫は母丘重・母丘奥

遼東の公孫淵は年々傲慢になり、呉の孫権の調略の手を受けつつ、不審な行動を続けていた。このため母丘儉は曹叡の命令により幽州刺史に転じた。237 年、高句麗や烏桓に援軍を求め、北方の余剰戦力を動員して公孫淵征伐を図ったが、衛臻から兵数

に任せ用兵を軽視していると批判された。結局公孫淵を攻めきれず撤退したため、かえって公孫淵の勢いを増幅させることになってしまい、公孫淵が燕王を自称することにつながった。翌年、司馬懿の指揮下でようやく公孫淵を破ることに成功した(遼隧の戦い)。この功績により安邑侯に昇進している。

呉の調略が朝鮮半島の諸勢力にも及んでいたため、魏が楽浪郡と帯方郡を設置して整備すると、朝鮮半島の諸勢力と関係が緊張したという。高句麗の東川王(憂位居)は公孫淵討伐には協力的であったものの、242年以降には再び魏と険悪な関係になった。このため母丘儉は高句麗への攻勢を強め、244年には更に東へと進んで高句麗の軍勢を大破し、都の丸都を蹂躪した。しかし東川王(憂位居)に逃れてしまったため、高句麗を滅ぼすことはできなかった。この功績により恩賞を受け、侯となった者は百余人もいたといわれる。隧道を掘り灌漑を行なったので、住民は恩恵を受けた。

1906年、輯安北方で母丘儉紀功碑が発見された。242年(魏の正始3年の建立と見られ、高句麗征伐の功績を称えたものである。高句麗征伐については三国志と三国史記高句麗本紀とではその年次にズレがあったが、この発見によりどちらも間違っていることが判明した。また、2005年3月5日、本籍地である山西省運城市聞喜県で、母丘儉とその一族を祀った碑が発見された。

最後の碑における「三国志と三国史記高句麗本紀とではその年次にズレがあった」から見ていく。母丘儉が高麗を打ち破ったのは244年で、この時の高句麗王は東川王である。「元号一覧(中国)」からは、244年は正始

五年となる。

三国志魏書三少帝紀では正始五年では見つからず、正始七年に次の記事が見つかった。

“正始七年 246 二月 幽州の刺史毌丘儉が高句麗を討った。五月、濊貊を討ち、これらを皆破った。韓の郡数 10 国が投降した。”

幽州刺史毌丘儉討高句麗 夏五月 討濊貊 皆破之 韓那奚等數十國各率種落降とある。なお正始四年に

“十二月 倭国の女王卑彌呼が使いを遣り奉獻した。”

倭國女王卑彌呼遣使奉獻

がある。

高句麗本紀東川王紀には

“二十年 246 八月 魏は幽州刺史毌丘儉に將萬人を付けて出撃し、玄菟郡に來侵した。”

魏遣幽州刺史毌丘儉 將萬人 出玄菟來侵

“十月 儉は丸都城を攻め陷した。”

儉攻陷丸都城

“二十一年 247 丸都城を復旧することが難しく、平壤城を築いた。”

王以丸都城經亂 不可復都 築平壤城

があり、正始七年の記事に対応する。この時は樂浪郡があり、その郡衙は平壤であるので、ここで築かれた平壤城は別のところにあったはずである。

東川王紀には

“十九年 245 十月 兵を出し、新羅の北邊を侵した。”

出師侵新羅北邊

という記事が書かれている。隋書の記事は母丘儉が高句麗を攻めた後に、沃沮に留まったものが新羅を為したとあったが、上記記事は、その前年に高句麗が新羅の北辺を侵したことになる。今のところは、留まったものが、新羅を乗っ取ったと解釈しておこう。これを前新羅とするかは保留としておく。

この新羅は何処にいたのか。楽浪郡衙が何と呼ばれていたか。魏の派遣軍に追われたのであるから、楽浪郡の郡衙の近くではない。

高句麗が楽浪郡の南を攻めることは出来ないはずである。

沃沮に留まった者について考える。

沃沮はかなり北で北朝鮮の咸鏡道辺りにいた(Wikipedia)。造った場所は沃沮の地と考えるのが自然である。これは、今までに思っていた前新羅、あるいは朴王朝、の位置とは近い。造った後南下したならば合うかもしれない。

隋書の記事 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 を考える。

其王は新羅の王と考える。留まったものが新羅を乗っ取り、王となったとすれば、時期は246年よりそれほど離れていないことになる。この時の百濟は馬韓の地にはなく、上の前新羅と共に、沃沮に近い位置にあったとするしかない。このとき、北史の 初附庸於百濟百濟 ということはある得る。

百濟征高麗 不堪戎役 以後は新羅成立後の話と考えればよいのではないか。

12.2. 新羅本記の王統（3つの姓）

既に取り挙げた正史で、新羅の王名が書かれているものを再掲する。

普通二年 521 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物（梁）

傳祚至金真平 開皇十四年 遣使貢方物（隋）

武徳四年 621 王真平遣使者入朝（唐）

本稿の立場では、正史から確認できるのは 26 代真平王以降で、それ以前は、三国史記から王統を調べるべきであるが、現状ではこれを試みる余裕はなく、Wikipedia から得た王統を表 12..1 新羅の王統とする。

ここで、王の姓は Wiki から得た。この表の最後の文武王の在位期間は 661 年から 681 年であり、この王からが統一新羅の時代となる。続柄は新羅本記から得た。また、王に相当する所に、居西干・次次雄・尼師今・麻立干らが用いられているが、これらは省略した。（居西干は初代、次次雄は 2 代、尼師今は 3-18 代、麻立干は 19-22 代、23 代以降は王）

次の表 12.1 で、3 つ姓が偏在していることが目につく。詳しく言えば、初代から 8 代までは 4 代の脱解尼師今の昔氏を除けば朴氏であり、9 代から 16 代までは 13 代の味鄒尼師今の金氏を除けば昔氏であり、17 代以降は金氏である。

表 12.1 新羅の王統

1 赫居世 朴1	16 訖解 昔8 奈解孫
2 南解 朴2 赫居世嫡子	17 奈勿 金2 仇道葛文孫
3 儒理 朴3 南解太子	18 実聖 金3 閼智裔孫
4 脱解 昔1	19 訥祇 金4 奈勿子
5 婆娑 朴4 儒理第二子	20 慈悲 金5 訥祇長子
6 祇摩 朴5 婆娑嫡子	21 炤知 金6 慈悲長子
7 逸聖 朴6 儒理長子	22 智証 金7 奈勿曾孫
8 阿達羅 朴7 逸聖長子	23 法興 金8 智證元子
9 伐休 昔2 脱解子仇鄒子	24 眞興 金9 法興弟立宗子
10 奈解 昔3 伐休孫	25 眞智 金10 眞興次子
11 助賁 昔4 伐休孫	26 眞平 金11 眞興太子銅輪子
12 沾解 昔5 助賁同母弟	27 善德 金12 眞平長女
13 味鄒 金1	28 眞德 金13 眞平母弟國飯女
14 儒礼 昔6 助賁長子	29 武烈 金14 眞智子伊龍春子
15 基臨 昔7 助賁孫	30 文武 金15 武烈元子

%% 在位期間

他の姓の中に一人ある王で昔王朝の初代王の脱解尼師今と金王朝の初代王の味鄒尼師今について新羅本紀の記事を見ることにする。

第4代 脱解尼師今については、前文に次が書かれている。

“脱解は多婆那國の生まれである。その国は倭国の東北千里にある。多婆那國王は娶女國の王女を妻とした。彼女は妊娠7年で大きな卵を産んだ。人々は不祥としてこれを棄てるようにいったが、彼女は帛の袋に入れ海に

流した。卵は金官国の海辺に流れ着いた。金官の人はこれを怪しんで放置した。卵は辰韓の阿珍浦口に流れ着いた。これは始祖の赫居世の在位三十九年のことである。老母が縄を用いて引き上げ、これを開けたら子供がいた。老母はこの子供を養った。・・・脱解と名付けた。”

脱解本多婆那國所生也 其國在倭國東北一千 初其國王 娶女國王女爲妻 有娠七年 乃生大卵 王曰 人而生卵不祥也 宜棄之 其女不忍 以帛裹卵並寶物置於櫝中 浮於海 任其所往 初至金官國海邊 金官人 怪之不取 又至辰韓阿珍浦口 是始祖赫居世 在位三十九年也 時海邊老母 以繩引擎海岸 開 見之 有一小兒在焉 其母取養之 及壯身長九尺 風神秀朗 知識過人 或曰 此兒不知姓氏 初櫝來時 有一鵲飛鳴而隨之 宜省鵲字 以昔爲氏 又解韞櫝而出 宜名 脱解

この記事に現れる国は多婆那国、倭国、娶女国、金官国、辰韓(阿珍浦口)である。

これらの間の位置に関する情報を拾っていく。まず多婆那国は倭の東北1000 里の所にある。逆にみれば、倭は多婆那国の南西にあったことになり、方角的には朝鮮半島に倭があったことになる。海岸線が南西から北東になっていると言えるのは釜山から西の部分である。

多婆那国から流れた卵が金官国を経て辰韓の阿珍浦口に流れ着いた。海流は東から北の間の方向に流れている。これより、金官国は多婆那国の北東から北の間と考える。金官国と辰韓の位置関係も同様と考える。この金

官国は釜山辺りで洛東江の西側とされている。辰韓の阿珍浦口についてはそれを比定する文献は見出していない。 %% 上の地名が特定できれば図

上記脱解王の記事を読んだ時の第一印象は、これはまるで王朝の始祖伝説ではないかということである。また、桃太郎伝説を思い浮かべる。桃太郎は始祖伝説の変形なのか。鬼を成敗して宝を持って帰るのは、強盗ではなく交易で財を成したのかもしれない。吉備と物部氏は関係があるとも言われている。朝鮮由来かもしれない伝説が吉備にのこっていることになる。これに関して色々な疑問が出てくるが、このノートでは扱える範囲外としておく。

脱解についての記事は、第2代 南解次次雄紀に

“五年 166(61) 王は脱解の賢さを聞き、長女の妻とした。”

王聞脱解之賢 長女妻之

“七年 168(63) 脱解を大輔とし、軍事と国政を任した。”

以脱解爲大輔 委以軍國政事

などが書かれている。また、朴姓の第3代儒理尼斯今は南解太子で、第5代婆娑尼師今は儒理王第二子である。一方、第9代伐休尼斯今は昔氏で脱解王子仇鄒角干之子と記されている。これは、朴氏の王朝の後に脱解を始祖とする昔氏を姓とする王朝を組み込む操作が行われたと考える。

七年の記事から、大輔という宰相の様な官位があったことになる。これは、百済の達卒、および、倭の大夫と大卒と同じではないかと考えている。

びんいん 大輔：dà fǔ、達卒：dá cù/zú、大夫： dà fū

脱解が流れ着いたのは辰韓であり、新羅とは書かれていない。朴王朝と昔王朝が別の王朝であったとすれば、脱解を初代とする昔王朝は辰韓の地にあったと考えざるを得ない。先に金官に流れ着いたことは、一時的に金官にいたことを示している。あるいは、父母などの近い先祖が金官国の出身であったかもしれない。

このとき、朴王朝は何処にいたか。これも辰韓の一国であった可能性が高い。では、斯盧國はどちらか。

辰韓が6国から12国になったことを考慮すれば、朴王朝は初めの6国の地にあり、昔王朝は増えた6国の地にあったとすれば、一応の解釋にはなるが、作業仮説とするほどの確信は得ていない。

金王朝の最初の王第13代味鄒尼斯今262-284について見ていく。

“味鄒尼師今が立った。味照ともいう。姓は金氏である。母は朴氏で、葛文王の伊柒の娘である。妃は昔氏の光明夫人で、助賁王の娘である。先祖は閼智で雞林の出である。脱解王は閼智を得て宮中で育てた。勢漢は閼智の子である。阿道は勢漢の子である。首留は阿道の子である。郁甫は首留

の子である。仇道は郁甫の子である。仇道は味鄒の父である。沾解は子が無く、國人は味鄒を王とした。これが金氏が国王となる始めである。”

味鄒尼師今立 一云味照 姓金 母朴氏 葛文王伊柒之女 妃昔氏光明夫人 助賁王之女 其先閼智 出於雞林 脱解王得之 養於宮中 後拜爲大輔 閼智生勢漢 勢漢生阿道 阿道生首留 首留生郁甫 郁甫生仇道 仇道則味鄒之考也 沾解無子 國人立味鄒 此金氏有國之始也

とある。ここで、沾解は味鄒の前の王である。

朴氏と昔氏の政権を引き継ぐ格好の姻戚関係である。最後は金王朝の始祖ということか。さすがに時代が下がるのか、始祖伝説なものは書かれていない。これに代わって、次の脱解王の大輔となった閼智から始まる系譜が書かれている。

閼智→勢→首留→郁甫→仇道→味鄒

ここでは ○○生△△ で続いているので、親子で続いている。ここで、仇道則味鄒之考也 を 仇道は味鄒の父 とした。この話は継体天皇紀を想い浮かばせる。

次の金氏の王である第17代奈勿尼斯今では

“葛文王仇道の孫で、父は末仇である。母は金氏の休禮夫人で、妃は金氏で味鄒王の娘である。訖解が薨じたとき、子が無く、奈勿がこれを継い

だ。末仇は味鄒尼師今の兄弟である。”

仇道葛文王之孫也 父末仇角干 母金氏休禮夫人 妃金氏 味鄒王女 訖解薨 無子
奈勿繼之末仇 味鄒尼師今 兄弟也

と書かれている。訖解は奈勿の前の王である。味鄒の在位期間は 262 年から 284 年で、奈勿の在位期間は 356 年から 402 年であり、妃の金氏が味鄒王の娘とするのは、年齢的に無理があると思われる。

Wikipedia「葛文王」では

葛文王は、新羅における王族の称号のひとつ。三国史記からは、王位にはつかなかった王の父や王の舅などに尊称として与えられたものと考えられている。発生の経緯や機能については未詳であり、新羅本紀に見られる最も早い封号の例は第 7 代逸聖尼師今 15 年（148 年）のことであり、「新羅での王の追封はすべて葛文王と称されるが、その意味はよくわからない」と分注にも記されている。また、三国史記職官志には「名称はしばしば現れるが、初めて設置された時期や位の高下のわからないもの」の筆頭として記されている。

第 22 代智証麻立干の時代に王号を麻立干から王に定めたと伝えられているが、1989 年に発見された迎日冷水碑文によると、智証王が 503 年 9 月時点では王ではなく葛文王と称されていたことが判っている。また、1988 年に発見された蔚珍鳳坪碑文には、第 23 代法興王が 524 年の時点で寐錦王の名で登場しており、同時に葛文王の名も見られる。このことから、6 世紀の新羅では寐錦王・葛文王が並存しており、

葛文王が寐錦王を補佐する関係にあったとも考えられている。

Wikipedia「新羅」に

韓国の研究者の中には、積石木槨墳(新羅の墓制)の副葬品と遊牧民族の副葬品との類似を指摘する意見がある。したがって韓国には、新羅の金氏王族が匈奴から渡来した或いは新羅人は匈奴の血を引いているなどの主張をする人物がいる。

Wikipedia「金日タイ」でも、匈奴起源は疑わしいが、匈奴を扶余に置き替えれば一考の余地がある。 と書かれている。

新羅本紀赫居世居西干紀 の前文を見ていく。

“始祖の姓は朴氏で諱は赫居世である。前漢の孝宣帝の五鳳元年 BC57 甲子四月丙辰、あるいは正月十五日ともいう、に即位し、居西干と名のった。このとき 13 歳であった。国名を徐那伐とした。是より先、朝鮮の遺民が谷間に分かれて住み、六つの国を造った。(6 個の国名)これらを辰韓六部とした。”

始祖 姓朴氏 諱赫居世 前漢孝宣帝 五鳳元年甲子 四月丙辰一曰正月十五日 即位
號居西干 時年十三 國號徐那伐 先是 朝鮮遺民 分居山谷之間爲六村 一曰闕川楊山村 二曰突山高墟村 三曰觜山珍支村或云干珍村 四曰茂山大樹村 五曰金山加利村 六曰明活山高耶村 是爲辰韓六部

次は Wiki「新羅」の朴氏の始祖説話で、赫居世居西干紀 の前文の上に

続く文のほぼ訳なので、一部修正し、引用する。

高墟村長の蘇伐公が蘿井の林で馬の嘶くのが聞こえたので近寄ったところ、馬が消えて大きな卵があった。卵を割ると中から幼児が出てきて育て上げたが、10歳を越えた頃、彼の出生が神秘的であったことから六村の人たちは彼を王位につけた。卵が瓢ほどの大きさであったため、辰韓の語で瓢を表す朴を姓として名乗った。

赫居世の造った国の名が徐那伐ということで新羅ではない。何故新羅の始祖としているのか。

びんいん 干: gān/gàn、汗: hàn、徐那伐: xúnàfá

これは、三国志での辰韓の古老のいう事と異なる。六村の名前から山・川までと村をとった部分は

楊山・高墟・珍支(干珍)・大樹・加利・高耶

である。この辰韓六部が辰韓の初めの6国のことか。三国志の辰韓・弁辰24国のうち弁辰の付かない12国、己祗國、不斯國、勤耆國、難彌離彌凍國、軍彌國、如湛國、戸路國、州鮮國(馬延國)、冉奚國、斯盧國、優由國に上記六部に対応する国があるとも思えない。このことから、赫居世の造った国は辰韓には無かったということになる。

東川王紀十九年 245 十月 出師侵新羅北邊 とすればいいのかもしれない。

3つの王朝の関係はという疑問は当然である。金王朝は統一新羅として

滅亡する 760 年頃まで続く。新羅本記の対外記事には、東沃沮や靺鞨などの北方の東夷諸国との記事と、倭や伽耶などの南方の東夷諸国との記事が初期から見られる。これから、朴王朝は北方で、昔王朝は南方で併存していたと考えられる。これを作業仮説としておく。

作業仮説 12.1. 朴王朝と昔王朝が併存していた。金王朝が両者を併合した。

この作業仮説に基づいて作成したのが次表である。

表 12.2 新羅の修正王統

				昔王朝			
朴王朝				1 脱解	162-185	24	57-80
1 赫居世	117-177	61	BC57-4	2 伐休	185-197	13	184-196
2 南解	177-197	21	4-24	3 奈解	197-231	35	196-230
3 儒理	197-230	34	24-57	4 助賁	231-248	18	230-247
4 婆娑	230-262	33	80-112	5 沾解	248-262	15	247-261
5 祗摩	262-284	23	112-134	6 儒礼	262-276	15	284-298
6 逸聖	284-304	21	134-154	7 基臨	276-288	13	298-310
7 阿達羅	304-334	31	154-184	8 訖解	288-334	47	310-356
金王朝							
1 味鄒	334-356	23	262-284				
2 奈勿	356-402	47					
3 実聖	402-417	16					
4 訥祇	417-458	42					
5 慈悲	458-479	22					
6 炤知	479-500	22					
7 智証	500-514	15					
8 法興	514-540	27					

12.3. 新羅追考

新羅が隋以前に朝貢したのは普通二年の梁のみである。百済は東夷伝のない珍と北斉を除いて晋から隋までの全てに朝貢している。高句麗は晋書を除く全てに、倭は北朝の魏書・周書を除く全てに書かれている。これは百済と新羅を考えるうえで、何らかの参考となるかもしれない。また、倭が南朝にのみ朝貢したのも興味あることである。例えば、倭と新羅が高句麗・百済より仏教の伝播が送れたのは北朝に朝貢していなかったことによると考える。

新羅本記の朴王朝や昔王朝の本記には幾つかの地名が現れる。これらの地名が特定できれば、多くの疑問の解消に役立つが、中国語・朝鮮語の知識、とくに音感、がないためこれは難しい。

国号に関しては2つの記事が新羅本記にある。1つは

“昔 7 基臨尼師今十年 285, 307 国号を新羅に戻した。” 復國號新羅

國號新羅 の前は何といていたのか。樂浪郡と帶方郡が減びる少し前である。

もう1つは

“智證麻立干四年 503 (大意) 国名は定まっていず、斯羅・斯盧・新羅の

3つの国名を称してきたが、今後は新羅とする。”

羣臣上言 始祖創業已來 國名未定 或稱斯羅 或稱斯盧 或言新羅 臣等以爲 新者德業日新 羅者網羅四方之義 則其爲國號宜矣 又觀自古有國家者 皆稱帝稱王 自我始祖立國 至今二十二世 但稱方言 未正尊號 今羣臣一意 謹上號新羅國王 王從之

ぴんいん ス羅: sī luo、斯盧: sī lú、新羅: xīn luo

このうち、斯盧國は三国志の弁辰韓二十四國の中にある

何故・どの様に3つの国名を称したのか。時系列的に順に用いたのではない。3つの王朝を統合・踏襲したと考えるのが妥当であろう。%% 疑問

新羅の出自については、梁書は辰韓の出で、隋書は高句麗の出、唐書は弁韓の出となっている。これは非常に奇異なことに見える。これらの情報は使者が質問に応じて答えが基となっているのではないかと考えている。時期的には、全て金王朝の基での使節であるが、使者は異なり、使者がもつ伝承を伝えたのではないか。梁書では 始使使隨百濟奉獻方物 とかかれ、百濟の使いに帯同したとあり、百濟系の情報。唐書の記事は、時期から、金王朝のもの。隋書の記事は高句麗系ものと言えれば面白いのだが、現状ではその判断には躊躇している。

このようなことが可能となるためには、表 13.2 の並立状態ではなく、もう少し複雑な並立状態から、金王朝による制覇を考える必要がある。試

案としては、始祖の位置を表 12.2 の位置にすることである。すなわち、金王朝の味鄒尼師今を昔王朝の沾解尼師今と儒礼尼師今の辺り、昔王朝の脱解尼師今を朴王朝の儒理尼師今と婆娑尼師今の辺りに置くことである。これが成り立てば、倭の五王に関しても新たな解釈が可能となる。

試みに、味鄒尼師今と儒礼尼師今の即位年を合わせた後、脱解尼師今と婆娑尼師今の即位年を合わせ、他は在位年数より算出して得たものが表 12.3 である。

王募名秦が朝貢した普通二年 521 の王は法興王 514-550 であり、王号の尼師今や麻立干を廃して、王を名乗った王でもある。智證麻立干 200-514 は法興王の父で前の王である。

表 12.3 新羅の再修正王統

1 赫居世	121-181			
2 南解	181-201			
3 儒理	201-234			
4 婆娑	234-266	1 脱解	234-257	
5 祇摩	266-288	2 伐休	257-269	
6 逸聖	288-308	3 奈解	269-303	
7 阿達羅	308-338	4 助賁	303-320	
		5 沾解	320-334	
	1 味鄒	334-356	6 儒礼	334-348
	2 奈勿	356-402	7 基臨	348-360
	3 実聖	402-417	8 訖解	360-406
	4 訥祇	417-458		
	5 慈悲	458-479		
	6 炤知	479-500		
	7 智証	500-514		
	8 法興	514-540		

母丘儉討高麗 は正始五年 244 であった。表 12.3 からは、この年の王は朴王朝第 4 代の婆娑尼師今か昔王朝の始祖脱解尼師今となる。

留まった地は蓋馬高原ではなかったか。ここならば沃祖の地でも不自然とは言えないであろう。これが南下して辰韓の地で国を造ったとすれば、隋書のいう高句麗の出も考えられる。

おわりに

%% 前 2 章に分散

この 2 つの parts では、まず、倭条の前に書かれている韓条をみた。続いて、筆者の中国に対して抱いているイメージにウィキペディア (Wikioedia 日本語) の記事を引用することにより、まとめることをにより、古代中国の歴史の概略とすることを目指した。ここまでが Part II である。

Part III では、高句麗・百済・新羅の王統を考えた。王統からみた三国史記の各国の記事の古代の記事の信頼度は

高句麗 > 百済 > 新羅・日本書紀

である。後漢書・三国志・晋書に書かれている扶余も興味あるが記事を抜き出した状況で留まっている。後漢書・三国志では 5 人の扶余王の名前が書かれている。倭王は 3 人である。

本 part では、三国の出自と王統を考察し、百済の修正王統と新羅の修正王統を 2 つ作成した。これらの(否定を含めた)検討が必要となる。

修正の対象となったのは、正史に朝貢の記事が現れる前のことである。また、修正王統は王統の組み替えであり、王の(時期的)移動を行うことにより得られたものである。このとき、各王紀の記事の処理については 3 通

りが考えられる。1つは、他国と関係するもので、記年は変えることは難しく。この種の記事は、移ってきた王の記事となる。次は、当該王固有のもの。言い換えれば、他の王の記事とはできないもの。こちらは、王と共に移動する。最後は、上記以外のもの。言い換えれば、どちらでもいいもので、これは、どちらかにでも配分することが可能となる。

ここで修正王統の扱いについては。次のように考えている。

百済本記の倭の記事は 阿莘王六年 397 王與倭國結好 以太子腆支爲質が初出であり、百済本記の倭の記事の引用は問題ないと考える。

一方、新羅に関しては、3 王朝の殆どの王紀に倭に関する記事が書かれている。なお、倭に関する記事は倭国・倭兵・倭人と 3 通りの書き方が為されている。

三国史記の検討は倭の五王(倭の東遷)を扱った後に行う予定である。それまでは、新羅の記事は修正王統を念頭において、引用することにする。

付録Ⅰ 三国史記新羅赫居世居西干紀

始祖 姓朴氏 諱赫居世 前漢孝宣帝 五鳳元年甲子 四月丙辰一日正月十五日 卽位
號居西干 時年十三 國號徐那伐 先是 朝鮮遺民 分居山谷之間爲六村 一曰闕川楊山
村 二曰突山高墟村 三曰 觜山珍支村或云干珍村 四曰茂山大樹村 五曰金山加 利
村 六曰明活山高耶村 是爲辰韓六部 高墟村長蘇伐公 望楊山麓 蘿井傍林間 有馬
而嘶 則往觀之 忽不見馬 只有大卵 剖之 有嬰兒出焉 則收而養之 及年十餘歲 岐
嶷然夙成 六部人 以其生神異 推尊之 至是立爲君焉 辰人謂瓠爲朴 以初大卵如瓠
故以朴爲姓 居西干 辰言王或云呼貴人之稱

付録 2 正史の隋書以前の新羅条

梁書

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有似中國 人 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人作之 世相係 辰韓不得自立爲王 明其流移之人故也；恒爲馬韓所 制 辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里 其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通使聘 普通二年 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評 五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名 有子賁 旱支 齊旱支 謁旱支 壹告支 奇貝旱支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 袴曰柯半 靴曰洗 其拜及行與高麗相類 無文字 刻木爲信 語言待百濟而後通焉

隋書

新羅國 在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將毌丘儉討高麗 破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗 百濟 之屬 兼有沃沮 不耐 韓獺之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 傳祚至金真平 開皇十四年 遣使貢方物 高祖拜真平爲上開府 樂浪郡公 新羅 王 其先附庸於百濟 後因百濟征高麗 高麗人不

堪戎役 相率歸之 遂致強盛 因襲百濟 附庸于迦羅國

其官有十七等：其一曰伊罰幹 貴如相國；次伊尺幹 次迎幹 次破彌幹 次大阿尺幹 次阿尺幹 次乙吉幹 次沙咄幹 次及伏幹 次大奈摩幹 次奈 摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大烏 次小烏 次造位 外有郡縣 其文字 甲兵同於中國 選人壯健者悉入軍 烽 戍 邏俱有屯管部伍 風俗 刑政 衣服 略與高麗 百濟同 每正月旦相賀 王設宴會 班賚群官 其日拜日月神 至八月十五日 設樂 令官人射 賞以馬布 其有大事 則聚群官詳議而定之 服色尚 素 婦人辮發繞頭 以雜彩及珠爲飾 婚嫁之禮 唯酒食而已 輕重隨貧富 新婚之夕 女先拜舅姑 次即拜夫 死有棺斂 葬起墳陵 王及父母妻子喪 持服一年 田甚良沃 水陸兼種 其五穀 果菜 鳥獸物產 略與華同 大業以來 歲遣朝貢 新羅地多山險 雖與百濟構隙 百濟亦不能圖之